

斜面 2017年1月5日

ハーケンクロイツ（かぎ十字）と米次期大統領トランプ氏の肖像を背にして、ナチスの制服を着た4人の政治家が闊歩（かっぽ）する。そんな絵を写した写真を、ドイツの有力週刊誌シュピーゲルが巻頭言に載せている



憲法学者の水島朝徳早稲田大教授がホームページで紹介している。ポーランドの愛国主義政党「法と正義」のカチンスキ党首、フランスの極右、国民戦線のルペン党首…。国民の不安をあおりながら反移民、反EUを訴え、トランプ当選で勢いを得ている



欧州は選挙イヤーを迎えた。3月のオランダ下院選は極右の「自由党」が第1党に躍り出る可能性がある。春のフランス大統領選はルペン氏が追い風を受けている。秋のドイツ連邦議会選では、難民受け入れに反対し「この国を取り戻す」と主張している右派政党が躍進する見通し



時代の針が逆回転を始めているのだろうか。水島教授はエーリッヒ・フロム の名著「自由からの逃走」を引いてファシズムの時代を振り返る。ナチス体制は、産業化が進行する中で疎外された個人が孤独や自由から逃走し権威に身を委ねた結果だったと



シュピーゲルの巻頭言は〈多くの無思慮な決断、あるいは何事にも無関心な態度は危険である〉と警鐘を鳴らしているようだ。高みの見物とはいくまい。不安や絶望に覆われれば強き者に進んで服従する誘惑は、どの時代、社会にもある。

（1月5日）